

國學院大學學術情報リポジトリ

〔談話室〕 「イギリス史」とEU離脱

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大久保, 桂子, Ohkubo, Keiko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000568

「イギリス史」とEU離脱

大久保桂子

私の専門分野は「イギリス史」である。尋ねられればそう答えるが、そのとき歴史学を学ぶ者としての私は、心がざわつく。あなたが思う「イギリス」はどこを指しているのか。その歴史とは、どこまでさかのぼることができ、何を以てその来し方を説明したことになるのか。

カタカナ日本語の「イギリス」の語源がイングランドであることはいうまでもないが、もとより現在の「イギリス」は、イングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドから成る連合王国(UK)であって、イングランド単体の国は存在しない。

それでも多くのひとは、「イギリス」はアングロサクソンの国であり、ヨーロッパ沖合の島国として千年を超える歴史をもっており、君主制と議会制の連綿たる伝統を誇ると信じている。しかしこの歴史物語は、イングランドが長年語り継いできたイングランドの物語にすぎない。そしてその物語を、あたかもブリテン島とその周辺諸島の歴史として語り、イングランドが周辺諸国、諸地域を統合し、偉大な帝国へと発展させた経緯を以て、「イギリス」史であると説くのである。

しかし歴史学のうえでは、イングランドの歴史がイギリス諸島全史のように装われた時代は、とうに過去のものである。J・G・A・ポコックが、長年の「イングランド中心史観」を批判して、「British history」を提唱してから、すでに半世紀が過ぎた。いまではBritish historyは古典的な学説となり、イギリス諸島の諸民族の攻防から国家形成へ、北アメリカ植民地建設へ、オセアニアを含むグローバルな帝国へと拡大するさまを、British historyの文脈で読み直す歴史

の書き換えが進みつつある。

先史時代から近代までを俯瞰するこの壮大な歴史概念は、歴史上存在したと想定されてきた境界が、いかにも流動的であり、地理的にだけでなく、文化的にも変容することを示唆している。イングランドの「一国史」観、勝利者史観への強烈な批判が、そこには込められていた。さりとて、この概念がある種のノスタルジーであることも、私は感じずにはいられなかった。ヨーロッパ辺境の島々が、長い長い攻防を経て、やがてUKを構成し、世界に植民地帝国を築いた。だがその成功の物語のあとには、ポストコロニアルな喪失と衰退の物語がある。喪失のすえに選り取ったUKの未来は、自らヨーロッパの一員となることであった。

UKのEU加盟が現実化しつつあったときに、ポコックがBritish historyを提唱したのは偶然ではない。それから半世紀後、UKのEU離脱が現実となったことは、British historyの復権宣言なのだろうか。私にはそうは思えない。少なくとも、UKが世界に残してきた歴史上の痕跡（植民地帝国）が、UK統合に一役買った、という旧来の帝国史解釈が、今日のUKに適用できるはずもない。かといって、（最近流行の概念を拝借すれば）礫岩国家の礫が剥がれ落ちるように、UKがヨーロッパ統合から離脱したことの必然を言うこともできない。それ自体が礫岩国家であるUKが、このさき、粉々の礫となって解体するとも予言できない。

私は「イギリス」史をヨーロッパ史の文脈で読み解くことを願ってきた者である。いま私の心をざわつかせるのは、British historyの復権ではない。礫岩国家の集合体であるヨーロッパが、このグローバル化に時代に、どのような統合のあり方を模索するだろうか。ヨーロッパ史上前例のないこの試験に、ヨーロッパとUKが、それぞれどう答えを出していくか。この問いのほうに、よほど私の心をざわつかせる。

もっとも、その結末を（結末があるとして）見届けるまで、私は生きてはいられまい。ただし、人間の寿命と歴史的時間の不整合にかぎり、私の心はざわついていない。すべての人にとって、歴史は未完だからである。

（イギリス近代史・西洋近世史）